

# ダーラム大学東洋学部日本語学科 における日本研究について

英国 **ダーラム大学東洋学部教授**  
**ジーナ・バーンズ**

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。

## 1 日本語学科設立の背景

ダーラムでの日本語教育は、1981年、拡張プログラムの一つとして始まった。

最初のコースは、学部 (School of Oriental Studies) の中国語専攻の学生を対象にした2年間のオプションという形で設けられた。その後、日本語と日本史が最終卒業単位の50%までを占めることができる「日本語を副専攻とする中国語専攻コース」の確立を望む声が学生から出されるようになり、これが、2年間の日本語のオプションコースに付け加えられるようになった。また、日本語のオプションコースは大学の他学科の学生に対しても開かれるようになった。1989年、学部長がDepartment of East Asian Studies (以下DEAS) に変更され、大学院レベルの日本語コースにつながるようになった。

更なるコースの拡張は、イングランド北東部の日本企業の投資を受けて進められた。日本企業の援助により、1992年から日本語を主専攻とするコース (full honours degree programme) が、日本語専攻学生に対して開かれるようになった。

こうしたコースが充実していくのと同時に、ダーラム大学で日本語教育が始まるきっかけとなった、中国語専攻学生に対する副専攻としての日本語コースは、段階的に廃止されてきている。日本語に関心のある学生は、他の学生同様、2年間の日本語入門コースを受講することができるためである。他に追加されたコースには、大学院生のためのコース (postgraduate diploma programme) がある。これには初級・中級が用意されている。

1991年、ダーラム大学は大学のコース組織を、伝統的な英国式プログラムから単位制に変更した。したがって日本語コースも、一年間で六つの単位が取れる、完全なモジュール制コースに変更された。単位には1単位、2単位、3単位の3種類があるが、全て一年間、つまり三つの学期に分けられた22週で終わることになっている。

## 2 学部生向けのコース

### (1) 学位

DEASは日本語のコースに二つのタイプを設けている。一つは、日本語を主専攻とする単一学位である。もう一つは、現代日本語と以下に示した他の科目の学位を合わせて取るものである。DEASで日本語で学位を取るには、現代日本語の集中プログラムが必修となっている。コースを良い成績で修了した学生には、BAの学位が授与される。1996年に最初の学位が授与された。(表1)

表1 1998年日本語コース卒業生

コース名	1996	1997	1998
日本語 (主専攻)			3(注)
日本語 and 経営学	8	12	6
日本語 with 政治学			
日本語 with 言語学			
日本語 with 史学			
日本語 with 第2言語 (フランス語・ドイツ語・スペイン語・中国語・韓国語)			2
日本語 with 哲学			
日本語 with 地理学			

(注)1998年に初めて日本語主専攻学生に、ファースト・クラスの単位が授与された。

学位を取る過程においては、予備プログラム (the Preliminary Honours programme) における、第1学年での学習が含まれている。この一年のコースは合格が不合格かによって評価され、それぞれの科目で40%に達している学生だけが第2学年に進級できる。第2学年の一年間は、日本の大学との交換留学によって日本で語学研修を受ける。

最終プログラムは2年間で、その間に12単位 (一年で6単位) を取得することになっている。学位のクラスは科目につけられた評価に基づいて決められ、最終学年で得た得点にはより高い比重がかけられる。3、4年次の得点を合わせた最終的な平均得点が、40%以上の学生にはHonours Degree (70%以上の学生はファースト・クラス、50 - 69%がセカンド・クラス、40 - 49%がサード・クラス) が与えられ、35 - 39%の学生にはPass Degree、そして34%以下の学生に学位は授与されない。

表2 必修日本語科目

学年	科目	単位数	時間/週
第1学年(注)	Introduction to Written Japanese 3時間Grammar 2時間Writing	2単位	5
	Introduction to Spoken Japanese 6時間drill 2時間language lab	2単位	8
第2学年	(日本での語学研修)		
第3学年	Written Competence in Japanese	1単位	3
	Spoken Competence in Japanese	1単位	3
第4学年	Advanced Japanese	1単位	4

(注)1998年の10月から第1学年に、すでに日本語学習経験のある学生を受け入れるクラス(accelerated)が加わる。A-レベルやGCSEの日本語合格者、または日本滞在の経験があったり、日系人である志願者が年々増えてきている。こうした学生は、日本語に関する知識や経験の無い学生とは区別して教える。第1学年に入門でないコースを設けているのは、今のところイギリスでダーラム大学だけである。

日本語科には、全ての学年において、必修の日本語の授業がある。(表2)

必修の日本語科目に加えて、日本語主専攻の学生は2年間、古典を受講しなければならない。また、日本語と経営学を専攻する学生は2年間、ビジネス日本語を取らなければならない。その他の学生のほとんどは、現代日本語の翻訳を中心としたテキストクラスを取っている。このクラスには1)現代日本歴史、2)現代日本文学、3)日本文化と日本社会があり、学生は自分の専攻と興味によって選択している。学部では今、日本語科の学生全てに必要な、テキストを使った科目作りの実現に向けて検討中である。

日本語学科には、必修であり、核となる言語の授業に加え、オプションで多くの言語以外の講義が設けられている。学生はこうした講義、特に自分の学位に関係するもの(例えば歴史)を受講することが望ましい。他の科目も合わせて専攻している学生は、その学部内の単位(1年次の入門に始まり、3、4年次の上級に続く一連の授業)を取らなければならない。

(2) 入学許可の手順

現在のところ、国内の各大学の定員数は英国政府によって定められており、その定員数を更に各大学内で、学部別に振り分けている。ダーラム大学DEASでは、学部別の定員は44名であるが、これは中国語、日本語、両学科にとって十分な定員である。ただし、海外およびEUのfull fee payingの入学希望者はこの定員枠には含まれない。学生はUCASを通じて入学願書を送ることになっているが、ダーラム大学の場合は学部とコレッジ(寮)であると同時に学問の場としての意味を持つ施設(寮)の両方に提出しなければならない。学生の学問的能力の可否は、DEASでは第一には学部で審査をされる。ここでは、最低B、B、C(3つのAレベルテストの成績が、B、B、C以上でなければならない)でAレベルもしくはそれ

れと同程度の結果を収めていることが基準となっている。また、何らかの語学あるいは数学の学問的能力や学習経験があることが望ましい。これに加えて、DEASでは一貫して入学希望の学生と個人面接を行ってきた。これは学生の能力やモチベーションをより正確に把握するためである。

DEASの学科別学生数は、フレキシブルなもので、その年度によって異なる。常に優秀な学生を優先するため、学部の定員44名をバランスよく振り分けられないことがある。

(3) 第1学年

前に述べたように、1年次のコースには、13の単位が含まれている。このコースデザインは『Japanese: The Spoken Language』(E. H. Jordan, 1987)を基礎としたものであったが、1998年10月から、教科書を『Yookoso: An Invitation to Contemporary Japanese』(Y. Tohsaku, McGraw Hill, 1994)に変更する予定である。『Yookoso』は、機能や場面を重視した教科書であり、現在DEASの教員全員がこのようなアプローチによる教授法が望ましいと考えているためである。

1年次のコース目標は、基礎的な会話力をつけて、2年次における日本の大学生活への準備を万全のものにすることである。加えて、最低漢字500字の読み書きができることである。この二つの目標に沿って学期中の授業がデザインされる。また、その後の夏休みの間に追加の漢字200字を読めるようにし、日本へ出発する8月の下旬から9月頃までには漢字の知識を広めておくことが望ましい。1998年10月からは、1年次で覚えるべき漢字は日本語能力検定試験3級程度のものの中から選ぶことを基準とし、残りは日本漢字能力試験からのものを加えていく予定である。学生向けには『Basic Kanji Book:基本漢字500』(加納千恵子他、凡人社、1991)を紹介しておく。

1年次のコースは、日本人教師が行うドリルと、英語を母語とする教師による文法の説明からなる。日本人教師は、4技能(話す、読む、書く)全てにおいて学習項目の導入、発展を受け持っている。いままで、DEASのルールとして学生は授業中だけでなく学内、学外問わずに日本人教師とは日本語でコミュニケーションを図らなければならないとしてきた。これは海外において日本語環境を作る試みであるが、概ね成功しているとさえいう。日本人教師との交流を通して、学年の終わりには皆教師の言うことを理解し、自分の言いたいことが伝えられるようになる。

1年次で取るべき単位は6単位である。日本語の授業

は4単位であるが、残りの2単位は日本語以外の教科から取ることになっている。これらの科目は普通、週に1回の講義である。DEASでは、2科目設けており、一つは『East Asian Traditions』、もう一つは『Modern East Asia』である。日本学などの専攻の学生はこの両方を取るが、大抵の学生はどちらか一方を取り、残った1単位を各専攻(史学、哲学、経営学など)にあわせた概論の教科に当てる。『East Asian Traditions』と『Modern East Asia』は東アジアにおける日本をテーマにしているため、日本語学科の学生が日本について深く掘り下げて学ぶのは3年次からである。DEASでは日本語学科も中国学科も東洋学の一つとして設けられており、学部全体も東アジア全域を視野に入れて学ぶことをねらいとしているため、できるだけ中国学科と日本語学科の学生をまとめて扱うようにしている。

(4) 第2学年

日本での語学研修は、学科生の必修科目である。中国語学科の場合、学生全員が海外の語学研修を一つの大学(北京人民大学)で行うのに対して、日本語学科はいくつかの大学に分かれて行っている。授業内容は各研修機関に委ねられており、ダーラムに帰ってくる前に研修先で学んだことを完全に身に付けることを目標としている。このように、研修先の大学に委託している部分が大いため、中国語学科のように学生全員が英国帰国時に同じ内容の授業で、同じレベルのことを学んできたというわけには行かない。ただし、1)教育漢字1006字の読み書きが完全にできること、2)卒業論文構想(英文)を書き上げておくこと、の2点を共通の課題として課している。漢字学習の補助教材としては『実用日本語漢字1000』(新宿日本語学校編、1991)を学生向けに紹介している。

(5) 第3学年

学生が日本から帰国すると、3年次に進級する。1998年度からは、3年次の学年の始めのオリエンテーションで、プレイズメンテストを実施することになった。これは学生を能力別にクラス分けするからではなく、帰国した学生の日本語力を正確に把握するために必要であると判断したからである。3年次では、日本語のクラスは週に6時間である。それに加えて、学生はCALL(Computer Assisted Language Learning)プログラムを利用できる。CALLを大いに利用し、文法の知識を強化するのがねらいである。DEASでは、できるだけクラスの能力別編成はしないことを信念としているが、来年度は今までと違って始めて日本で三つ以上の異なる教育機関で研修し

た学生たちを迎えるため、能力別編成が必要になるかもしれない。なお、ここでCALLプログラムについて説明しておく。CALLは、DEASシニア・インストラクター、クロス尚美が開発にあっている。また、このプログラムは、ダーラム大学Teaching & Learning Initiatives Advisory Groupからの援助を受けている。CALLは学生の自習用に開発されたもので、学生は個人の能力にあわせて学習を進められる。内容は、中級レベルの日本語文法の基礎固めと日本で学んだことの復習が中心である。

教科書についてであるが、1996年度では、『コンテンツポラリー-日本語中級』(奥村訓代・松本節子編、桜楓社、1989)今年度では、『文化中級日本語』(文化外国語専門学校編、凡人社、1991)を使用した。来年度も引き続き『文化中級日本語』を使用する予定である。1年次よりも日本語の授業時間数が減ってしまうため、3年次では日本語の会話力を身につけるチャンスがないとの不満がどうしても出てしまう。しかしほかの専門科目が多く入ってくるため、時間数が減ることは避けられない。そこで、学外に会話力向上の場を求めることになる。幸い、語学研修先の教育機関からの交換留学生がちょうど良い話し相手になっているようである。漢字については、学年の終わりまでに、常用漢字をすべて読めるようになることが目標である。更に、それぞれの専攻(ビジネス日本語、古典、現代日本語)における専門用語の語彙力を広げていかなければならない。また、中には12月の日本語能力検定試験2級を受けて、合格する者もいる。

(6) 第4学年

4年次で必修の日本語の授業は週4時間である。また、卒業論文は日本語の文献、資料等を取り入れることを義務づけている。図書館の利用法、インタビューの仕方、アンケートの作り方や分析の仕方の学習をした上で、卒業論文の作業の大半は3年次から4年次にかけての夏休み中になされる。会話の授業ではプレゼンテーション、インタビュー、ディベート、説明の力をつけることを目標としている。読解・作文に関してはより正確な読み、翻訳に頼らない作文力を目標とし、これは特に時間を設けずに、ビジネス日本語、古典、現代日本語等の専門的な日本語の授業でまかなわれている。今年度までは、4年次で教科書を使用することがなかったが、来年度から教科書の使用を検討中である。

4年次の終わりまでに、漢字については常用漢字すべて



日本語コース立案者のひとり、Dr. McClure(左、現在は米国へ帰国)と日本現代史学者のDr. Weste(右)



自習用に開発されたCALLプログラム  
(操作しているのはクロス尚美氏)

の読み書きができることが  
目標である。学生向けには  
『The Complete Guide to

Everyday Kanji』(Y. S. Habein & G. B. Mathias、講談社インターナショナル、1991)を紹介している。加えて、学生の日本語力については日本語能力検定試験2級に良い得点で合格する、または1級程度の能力に達することが総合的な目標である。日本語能力検定試験は年に一回、12月に実施されるため、学生には第1学期終了後に各自受験するよう、促している。

日本語能力検定試験は、国際交流基金と、AIEJを通じて行われるものであるが、その他にも、学生の技能向上を量る目安になるものが二つある。一つはPeter Parkerのビジネス日本語スピーチ・コンテストであり、もう一つは、Ivan Morris賞(作文)である。これらは全国的な規模で、イギリスの同じような教育機関からの学生たちと競うことができるため、全国でのダーラム大学生のレベルを知る目安にもなる。今年度は、3年次の学生がPeter Parkerのビジネス日本語スピーチ・コンテストで3位に入賞した。また、同コンテストの最終選考では3分の1をダーラムの学生が占めた。ほかには、96年2月の長野オリンピックでイギリスのボブスレーチームの通訳を務める(3年生)など、学生は積極的に学外で自分たちの可能性に挑戦している。

### (7) 筑波大学とのつながり

過去7年間、DEASは日本の筑波大学第2学群日本語・日本文化類と密接なつながりを持ってきた。同大学の石田敏子教授の協力を受け、毎年同学類卒業生が日本語教育の経験を積むために「Practice Teacher」として派遣されてくる。96年度からは三年間の予定でSt. Mary's Collegeを通じて帝京大学(沖永荘一総長)からの援助を受けている。この「Practice Teacher」は、St. Mary's Collegeで日本語趣味講座を受け持つと同時にDEASでも1年生、3年生、また場合によっては古典の授業も担当している。

もう一つ、筑波と協力しているプログラムにEメール・プロジェクトがある。これは、DEASの3年生が作文をEメールで筑波大学の学生に送り、筑波大学の学生がそれを添削して送り返すというものである。このプロジェクトによって、ダーラムの学生はワープロで日本語を打つ練習ができ、また学習の動機を高めることができると同時に、筑波の日本語教育専攻の学生は良い経験になる。双方の学生にとって意味のあるプロジェクトであると言える。

## 3 大学院向けのコース

ダーラム大学では大学院レベルの学位も取得できる。

以下にその学位を挙げる。

(1. ~5. まだがDEAS所属、6. と7. は考古学所属)

1. Diploma in Japanese
2. Diploma in Advanced Japanese
3. MA in Modern East Asian Studies
4. MA in East Asian Research
5. MA in East Asian Art & Archaeology
6. MA in Artifacts & Museum Studies
7. MA in Prehistory (East Asia)

1. Diploma in Japaneseと、2. Diploma in Advanced Japaneseのみは、語学に関するものである。そこで、ここで詳細を述べておく。これらディプロマ・コースは入学資格としてすでに何らかの学士号を有していることを課している。ゆえに、扱いは大学院生と同じであるが、コース内容はほとんど学部生と同じ(但し卒論はない)であるため、MAコースとは言わずにディプロマ・コースとしている。

1. Diploma in Japaneseから直接、2. Diploma in Advanced Japaneseに進むことはできない。1. は学部の1年生と同等のレベルであり、2. は3年生と同等のレベルである。学部の2年生は日本へ行っており留守であるが、その2年次のレベルの相当するコースと言うものが用意されていないからである。

しかし、1. か2. どちらかのコースからMAコースへ進むことは可能である。特に、ディプロマ・コースと3. MA in Modern East Asian Studiesとの組み合わせは大変効率よく学べる。ディプロマで語学を集中的に学び、その後のMAコースで、東洋学を学んだり、研究のためのトレーニングを積んだりできるからである。

## 4 今後の展望

本学部の目下の目標は、筑波大学との協力により、教師養成組織を作ることによって、非常勤教師の雇用制度を安定させることである。できれば学部学生にこの講座を開き、そうすることで学生は自分の学位のために、有効な教育訓練を受けることができる。DEASでは、外国語としての日本語教育のMAを創設したいと考えており、できれば日本語教育におけるSecondary Schoolとの連携を図りたい。こうした計画は、学生に完璧な日本語のトレーニングを提供し、卒業生が次の段階で日本語を自己学習できるようにするための、言語教育の強化を図るものである。